

二〇二〇年度

和歌山信愛高等学校

入学試験

国語 (六〇分 一〇〇点)

受験上の注意

- 一 この問題冊子は、1ページから25ページまであります。始まりのチャイムが鳴ったら、確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に記入しなさい。
- 三 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 四 終わりのチャイムが鳴ったら、問題冊子の上に、解答用紙を開いたまま裏返して置きなさい。

〈解答は、句読点や記号も一文字分と数えて記入すること〉

受験番号

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校の頃、よく野球盤で友だちと遊んだ。パチンコ玉のようなボールをピッチャーが投げて、もう一人が野球盤に固定されたバットでタイミングよく打ち返すというゲームである。ところが、このゲームのピッチャー側には、^a ヒミツ兵器の「消える魔球」が用意されている。これは野球盤のホームベースの前に切れ込みがあり、それが下がって、ボールが床下に消えてしまうというものである。これをやられるとバッター側はもうお手上げだ。野球の勝負の醍醐味^{だいご}が、いかにピッチャーの球にタイミングを合わせて打ち返すかだとするなら、消える魔球はその勝負にどっかのおっさんの[※]茶々が入るような仕組みである。^① なんで、こんな「おっさんの茶々」を許すような仕組みになっているのだろうと思わないでもないが、野球盤に「消える魔球」が登場して以来、なくなることなく現在に至っており、どこか人の心を^bミリョウする部分があるのだろう。

科学というと、この世にある法則や原理の発見など、世界の真理や真実を解き明かしていくというイメージが強いものである。しかし、この世の真実、つまり「正しい」ことは、一体、何なのか。以下、^c屁^へリクツのような話が続くことになるが、これは^d実際、^dタンジンジュンな話ではない。たとえば「リンゴが木から落ちる」という現象がある。これはニュートンが万有引力を発見したきっかけとなったとされる「^e由緒正しい^{ゆい}」物理現象であるが、この「リンゴが木から落ちる」というのは「正しい」のだろうか？
もし「正しい」のなら、^② それはどうしてなのだろうか？

人間が^eハアク^あできることというのは、基本的に経験から来ており、「リンゴが木から落ちる」ことが正しいと信じられているのは、リンゴを枝から切り離せば地上に落下するということを、これまでずっと人類が経験してきたからである。そして、そこからニュートンは、万物はすべて互いに引き合っているという、「リンゴと地球」の関係だけに^{とど}留まらない、たとえば星と星の関係

のような、より一般的な現象に適用できる「万有引力の法則」を発見した。そしてそれが今では物理学上の「正しい」法則と信じられている。この例は科学的な「正しさ」についての非常に重要な二つの考え方を含んでいる。

一つは「繰り返し起こることは法則化できる」という考え方である。そして、もう一つは、「法則化できたことは、他の現象にも応用できる」という考え方である。^③前者は「帰納法」、後者は「演繹法」と呼ばれる論理であり、科学を支える非常に重要な考え方となっている。リングはいつ見ても、木から切り離されれば、地面に落ちるし、それを地球とリングが引つ張り合った結果と考えると、より多くの現象にも同じ考え方を適用できるようになる。実際、その法則を使えば、惑星や彗星の動きまで正確に予測できるようになるのだから、それは確かに素晴らしいことである。

しかし、^④帰納法というのは、さほど根拠がしっかりした考え方というわけでもない。たとえば、昨日、阪神が勝っていたとする、そしてなんと今日も勝っているのではないか。帰納法が成り立つなら、明日も勝つし、明後日も勝つ。おお、秋には優勝だく！ というリックツが成立するか、という話である。これまでそうだったから、この先も必ずそうなるという論理は、一般的には成立しない。では、リングはいつ見ても地面に落ちるが、それはこれまでの観測ではそうであっただけで、この先、落ちないことが起こる可能性はまったくないのだろうか？ ないと言うなら、どうしてそう言えるのだろうか？

実は帰納法と演繹法が世界を説明する論理として成り立つためには、重要な前提がある。それはこの世界は同じことをすれば、同じ結果が返ってくるようにできている、という仮定である。別の言葉で言うなら、この世は、ある種、機械的な「法則」により支配されているという仮定だ。この前提で考えれば、事例を集めて「法則」の発見にたどり着けば、その後はすべてそれに従って現象を説明・予測できることになる。この前提は今や現代科学の根幹となっているが、絶対的に正しいのか、それは誰にも分からない。ただ、それに基づいて構築された近代の科学は、この世の多くのことを説明・予測するのに成功し、実際に役立ってきた。

この世には消える魔球もおっさんの茶々もなく、同じことをすれば、同じ結果が返ってくるようにできている、だから世界は説明できる、と現代人は信じている。私も科学の世界に身を置く者の一人として、大筋でこの世界観に異論を持つわけではもちろんない。そう、だからリングは木から落ちてきたし、今からも落ち続けるはずなのだ。

しかし、少し待ってほしい。本当のリングはこの世でいつも同じように地面に落ちるだろうか？ 物理学では地球上における物体の落下速度（ v ）は、初速が0であれば $v = gt$ （ g は重力加速度、 t は時間）で与えられるとされる。だが、地球上のどこでリングを落としても、この公式通りにリングは落下などしない。それは空気抵抗があるからである。もっと言えば、たとえば台風で落ちるリングを見てみよう。場合によっては、リングは落下どころか風に飛ばされ舞い上がるかもしれない。こんなことを書いていたら、何をバカなことを言っているのだ、そんなことは当たり前ではないか、重力加速度通り（法則通り）の速度を計測したいのなら、真空条件でやらないといけないに決まっているだろうと、物理学の先生に笑われるのがオチである。しかし、そんな「バカなこと」を大真面目にやっているのが、同じ科学と言っても、たとえば生命科学である。

それはどういう意味か？ 一例を挙げれば、あるウイルス病の薬として、※レセプターとウイルスの結合を阻害する薬があったとしよう。ウイルスとレセプターとその薬だけを試験管内で混ぜれば、なんと結合を百発百中阻害する。すごい薬ができた、喜んで患者にその薬を投与してみたたら、一〇%の人にしか効果がない、というようなことが普通に起こるのだ。つまり、「法則」的な意味では（試験管の中では）一〇〇%効果がある薬の効き目に「茶々を入れるおっさん」が現実の人間の体の中にいるのだ。それは、薬を分解して体外に排出してしまう酵素であったり、薬の効き目を阻害する細胞の中の物質であったりといったようなものである。そういったものが、患者一人一人違ってくる。それで薬の効き目も違ってくる。それは本来、地球の中心に向けて重力加速度に基づき真っ直ぐに落下するはずのリングが、現実の世界では空気抵抗のため理論通りには落ちてこないことと、基本的に

は同じである。

それでは、リンゴの落下実験で真空にしたように、細胞の研究でもそういった攪乱要因を取り除けばいいではないか、複雑な現象をタンジュン化して、その中にある「法則」を見つけ出すのが科学ではないか、そう言う人もいるだろう。まったくもって、ごもつともな意見である。しかし、現実の生物・細胞を使った研究などでは、攪乱要因の数はあまりに多く、それらを完全に排除した状態をつくるのが、実務上、不可能に近い。あちらこちらに「おっさん」がいて、茶々を止めないのだ。

また、もう一つの問題は、そういった攪乱要因を取り除けば取り除くほど、現実から離れていってしまうということである。極端な話、試験管の中にウイルスとレセプターと葉のみを入れれば、「科学的な真理」を得られるかもしれないが、人に投与して効き目がなければ、そんな「真理」は役に立たない。ニーチェは「神は死んだ」と宣言したが、どっこい「茶々を入れるおっさん」は生きている。それが現実の世界だ。

⑤ この細胞の研究における「おっさんの茶々」問題は、科学全般を考える上でも、実は一つの重要なポイントである。最初に書いたように科学的なものの考え方への基礎には、この世界は「法則」に支配されており、同じことをすれば同じ結果が返ってくるという前提がある。そうであるなら、「正しい」ことというのは、1足す1が2になるように、つねに“100%”正しいものとして与えられるはずである。A、現実の世界では、同じことをしても同じ結果が返ってこない。

したがって、そういった現実的な問題に対する科学的な知見というのは、「これまでどれくらい、この薬の使用例があり、そのうちどれくらいの人で効果がありました」というような統計学的なものにならざるを得ない。B、「この風邪薬はこの人に効くのか？」といった現実的な命題に対する科学的な回答というのは、「60%の確率で効果がある」というような確率的なものになってしまう。Yes・Noで答えるとすると「分からない」である。

批判を承知で言えば、科学には実は性格の異なった二つのものがあるのだ。一つはこの世の真理を求め、タンジュン化された条件下で一〇〇%正しいような法則を追い求めるもの。C もう一つは元来「一〇〇%の正しさ」などあり得ない、茶々を前提とした、より現実的なものである。このかなり性格の異なった二つのものが、「科学」という名の下でごっちゃになっている。特に前者の「科学」が持つ、この世界の真理や真実を解き明かしていくというイメージに、あたかもその対象が何であっても「正しい」と、 「正しくない」ことを判定し、明確な回答を与えてくれるような期待を抱かせる。

しかし、実情を言えば、一般に思われているよりはるかに多くの「科学」が後者のグループに属している。特に、人の生活に密接に関連するような話は、ほとんどがそうである。

だから、低線量被曝^{ばく}や残留農薬の問題でも、「絶対安全なんですか？」という問いに対して、科学者は「D」と答えるのが関の山である。「D」って、何ですか。もしうちの子ががんになったら、どうしてくれるんですか！」と怒られたら、もうお手上げだ。おっさん、お前のせいやぞ。

(中屋敷^{なかやしき} 均^{ひとし} 『科学と非科学 その正体を探る』より)

注 ※ 茶々：他人の話を妨害して、ひやかしを言うこと。

※ レセプター：生物の体内にある、刺激を受容する器官。ウイルスはこの器官から細胞へ侵入する。

問一 〜〜線部 a く e のカタカナを漢字に直さない。(楷書ではつきりと書くこと。)

問二 ー線部①「なんで、こんな『おっさんの茶々』を許すような仕組みになっているのだろうと思わないでもないが」について、次の説明のうち**正しくないもの**を一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「こんな」は連体詞である。
- イ 「ような」は形容動詞である。
- ウ 「いるのだろうと」で一つの文節である。
- エ 「思わないでも」の「ない」は助動詞である。
- オ 「ないが」の「ない」は形容詞である。

問三 ー線部②「それ」の指示する内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ニュートンが万有引力を発見したこと。
- イ ニュートンの発見した万有引力が「由緒正しい」物理現象であること。
- ウ 「リンゴが木から落ちる」という現象。
- エ 「リンゴが木から落ちる」というのが「正しい」とされること。
- オ 「リンゴが木から落ちる」という現象は万有引力を発見したきっかけとされること。

問四 —— 線部③ 「前者は『帰納法』、後者は『演繹法』と呼ばれる論理」について、次のア～ウを帰納法の例、演繹法の例、そのどちらでもない例に分類しなさい。

- ア 温暖な地域では果物が育ちやすいから、あたたかい和歌山県ではみかんがたくさんとれるにちがいない。
- イ 和歌山のみかんはおいしいから、愛媛のみかんや静岡のみかんや熊本のみかんより愛されるはずだ。
- ウ あら川の桃も有田のみかんも北山村のじゃばらもおいしいから、和歌山県の果物は皆おいしいと言える。

問五 —— 線部④ 「帰納法というのは、さほど根拠がしっかりした考え方というわけでもない」と筆者が主張する理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア リンゴが木から落ちたのは、地球とリンゴが引つ張り合った結果だというのは無理があるから。
- イ 個別の現象を他の現象に応用できるとする帰納法は、科学の世界に身を置く者にしか通用しないから。
- ウ 多くのことを説明・予測するのに成功した、ある種機械的な「法則」にこの世は支配されているから。
- エ 阪神は弱いチームなので、昨日も今日も勝ったからと言って明日も勝つとは言いきれないから。
- オ 過去と同じことが未来にも起こるとするのは仮定にすぎず、その通りにいかない場合もあるから。

問六 ———線部⑤ 「この細胞の研究における『おっさんの茶々』問題」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「おっさんの茶々」を最も端的な言葉で表した一語を本文中から抜き出しなさい。

(2) 「細胞の研究における『おっさんの茶々』問題」とはどういう問題ですか。本文中の言葉を使って七十字以内で説明しなさい。

問七 に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ なぜなら ウ たとえば エ そして

問八 本文中、二つの に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 安全を保証します
イ 安全と言わざるをえません
ウ 安全ではありません
エ だいたい安全です
オ 専門外なので分かりません

問九 次の表は、本文中に挙げられている例をまとめたものです。(ア) (イ) (ウ) (エ) に当てはまる言葉を、本文中からそれぞれ指定の字数以内で抜き出しなさい。

i 人の生活に関連する事柄	ii おっさんの茶々	i に ii が入った結果
I 野球盤でピッチャーが投げたボールをバットで打ち返す	(ア 五字以内)	ボールが打ち返せない
II リンゴが木から落ちる	(イ 五字以内)	リンゴがまっすぐ木から落ちない
III ウイルス病の薬を作る	(ウ 二十字以内) (エ 二十字以内)	薬の効果がなくなる

【二】 次の文章は魚住直子の『卒業』の一節です。主人公の後藤寿々は新人女性消防士です。初めての大きな火災現場への出勤の際、現場で大きなミスを犯してしまった寿々は、上司の中隊長に厳しくとがめられます。以下はそれに続く場面です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「後藤、ちよつと。」

いつもの顔と違う厳しい表情だ。

「最初だったから相当割り引いても、補助もできないとはおまえ、ひどいな。失敗は許されないんだぞ。一人でもミスすれば他の隊員の命も危険に a ことになるんだ。わかっているのか。」

他の先輩たちはそれぞれ仕事をして寿々のほうを見ていない。でも中隊長の言っていることは当然だという雰囲気漂っている。返す言葉もなく、寿々はうなだれた。中隊長は厳しい表情のまま、寿々を見つめている。

「ここに来て半月たつが、おまえ、よくぼんやりしているだろ。何か文句があるなら言えればいい。言いたくないなら言わなくていい。とにかくもつと本気を出せ。」

うなだれたまま寿々は少し驚いていた。そんなふうに見られていたなんて思わなかった。配属されてから自分なりに頑張ってきた。及第点は当然もらえていると思ひ込んでいた。

「女だからすぐ**※**予防に異動するだろうとか、資格取って**※**救急に回るとかいろいろ考えているのかもしれないが、ここにいる間は、精一杯責任を果たせ。後藤が消防士だから言ってるんじゃないぞ。おまえは社会に出たんだ。学生じゃないんだ。自分の責任を果たして金をもらおう立場になったんだ。自分の仕事に全身全霊を b のは当たり前のことじゃないか。」

「すみません。」

寿々は頭を下げるしかなかった。

その日の勤務が終わっても、① 頭を一撃された感じが続いていた。

これからどうしよう。消防士を辞める？ まさか、そんな気持ちはない。体を動かすことで人の役に立つ仕事をしたいという気持ちは今も変わっていない。

でも訓練ではない本物の炎の中に、ためらいもなく飛び込んでいく先輩の姿。あれができるか？ いや、できるか、じやない。やるのだ。怖いけれどやるのだ。そのために自分を鍛えなければいけない。

次の勤務から事務仕事は集中してなるべく短い時間で済ませることを心がけた。自宅でも自主トレを始めた。

寿々が感じた怖さは、いざ現場に出てみたら自信がなかったことに原因がある。何もできないくせに自分の力を過信していたのだ。そう思うと恥ずかしくてたまらなかった。中隊長の言うとおりに、寿々の失敗は即、他の隊員の危険につながる。これまでは署へ電車で通っていたが、トレーニングを兼ねてジョギングで通勤することにした。

※えりと友香のことは完全には忘れられなかった。携帯を見る度、二人のことが頭の隅に浮かぶ。日帰り温泉の話を思い出して落ち込みそうなときは、すぐに走ることにした。夜中でも自宅を飛び出し、走る。全力で走ると、忘れられる。

路地を抜け、児童公園を通り、中学校脇の道に出る。「ごっつあん」と呼ばれて、この道をとぼとぼ歩いていた中学時代。その後、反転したように楽しかった高校時代。一本の記憶の綱がずるずる引き出されるが、寿々はすぐ、あの熱い煙と生きているオレンジ色の炎を思い出す。炎の中で戦う先輩たち。② 今、自分がするべきことは何か。

暗い夜道を全速力で走った。びゅうびゅう耳元でうなる風を聞きながら転がるように駆け続けた。

二度目の火災現場出勤は一週間後だった。

「後藤、※消火栓！」

中隊長の指令に車内で地図を見て調べる。完全に覚えた担当地区の地図を繰ると、すぐに見つかった。三分で現場に到着すると、

一戸建ての二階の窓から煙が出ている。

「このお宅の人は、いませんか。このお宅のこと、知っている人はいませんか。」

中隊長の呼びかけに、野次馬の中からエプロンをつけた女性が出てきた。

「後藤は※三連梯子！」

「はいっ。」

寿々は梯子を持ち、また先輩と走る。煙が出ている部屋の隣の部屋のベランダに梯子を掛ける。※ 空気呼吸器の面体を装着した先輩二人が登っていく。寿々は、そのまま延焼の見張りを命じられた。

「放水始め！」

消火が始まる。寿々にホースの補助につく指示はない。風はほとんどない。庭もあり、隣家とも離れている。それなのに延焼の見張りというのは一線から外されたのだとわかる。③ 前回の雪辱戦にはまだ早いと自分でも思っていたが、外されたと思うと悔しかった。

放水が始まるとすぐに煙は消えた。

「後藤、念のためシートをかけておけ。」

中隊長の指示を受け、寿々は玄関から一階に入った。放水された二階の部屋の真下は和室で、タンスや棚が置いてある。天井から水漏れがしている。寿々は家具が濡れないようにブルーシートをかぶせた。

その部屋の隅に電子レンジほどの大きさの段ボールの箱があることに気がついた。開いているフタから中をのぞくと、何かと目が合い、どきつとした。犬だ。ミニチュアダックスフントの子犬だ。黒く潤んだ目をして寿々を見上げている。不安なのか体は小刻みに震えている。このままでは水がかかってしまうかもしれない。

段ボール箱を抱えて玄関を出た寿々に、

「後藤、何を持ってるんだ。」

すぐ先輩がやってきた。

「犬がいたんです。濡れるとかわいそうだと思いました。」

すると、最初に中隊長と話をしていたエプロンの中年女性が飛び出てきた。

「わんちゃん、大丈夫でした？」

「ご近所の方ですか。」

先輩がきくと、

「ええ、すぐその者です。」

エプロンをした女性は斜め前の家を指さして名乗る。

「もうすぐご家族の方が戻ってこられますから、それまで預かってもらえますか。」

「もちろん構いませんよ。」

女性は快くうなずくと段ボールを受け取った。

署に戻り、使ったホースをデッキブラシでこすりながら寿々は思わずため息が出た。

本気を出してやっているつもりだったが、まだまだということを身にしみて感じる。今回も早く消火できた火事だったが、寿々自身は何もできていない。勉強することが山ほどある。

④ 深呼吸してから、さらにブラシでこすっていると、後ろから声がした。

「あの、後藤さん。」

見ると、消防署の制服を着た女性だ。といっても、寿々のようなズボンの制服ではなく内勤者のスカートだ。たしか予防課に勤

めている人で寿々よりも年上の女性だ。挨拶はしたことがあるがしゃべったことはない。

「お疲れ様です。」

ブラシを持つ手を下げ、直立不動の姿勢をとって一礼する。相手は「いえ、そんな。」と笑った。

「お仕事中、こんな話をしてすみませんが、後藤さんも今度、食事しませんか。」

「え？」

「署内の女性で集まって御飯を食べる会を時々やっているんです。最近、女性の救急さんや消防士さんも増えてきたでしょう。今度うちに入ってきた後藤さんも、ものすごい努力家で、男性に負けないすごいパワーがあるよって、皆でよくうわさしているんですよ。」

⑤ 寿々は目を丸くして相手を見つめた。自分とは全然関係のない人だと思っていた女性だ。その寿々の表情を見て、女性は少し慌てた顔になる。

「いえ、別に公式の集まりじゃないんです。でも、もし後藤さんの都合が合うならぜひと思つて声を掛けたんです。」

「こちらこそ、どうぞよろしくお願いします。私も他の人とお話したいです。」

寿々は急いで頭を下げた。女性はうれしそうにうなずいた。

「よかった。じゃ、また連絡しますね。」

それから二日経った日の午後。事務室で書類作成していると、客がやってきた。前回の出場で、火事を起こした一戸建ての主婦と小さな男の子だった。

「このたびは大変ご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした。」

主婦は消え入りそうな声で言う、もう一度頭を深く下げた。

「それからあと、犬のことなんです。すぐに外に出してくださいって、本当にありがとうございました。実は子供にせがまれて飼いはじめたばかりの犬で、火事の知らせを聞いたとき、犬はどうなった、どうなったって、もうパニックみたいになってしまったんですけど、すぐにお向かいの家に預けてくださったそうで本当に助かりました。それでどうしてもお礼を言いに行きたいと息子が言いまして、こちらに伺ったんです。」

「おい、後藤。」

机でパソコン入力していた寿々が呼ばれた。

「犬を外に出したのは、こちらの消防士です。」

主婦は寿々を見ると、驚いた表情を浮かべた。

「女性の方だったんですね。」

寿々は「どうも。」と頭を下げた。すると主婦の隣に立っていた幼稚園くらいの子供が寿々を見上げて大きな声で言った。

「ジョンを助けてくれて、どうもありがとうございます。」

男の子はぎこちないけれど、丁寧なお辞儀をしている。

「そんな、たいしたことはしてませんから。」

寿々は戸惑った。お礼を言われるほどのことはしていない。

それでも思わず目が熱くなる。慌てて奥歯をかみしめた。二人が帰ると、中隊長が優しい顔に戻って寿々に笑いかけた。

「もつと頑張れよ。」

注

※ 予防：消防組織の中で、火災予防に関する業務を行う部署のこと。

※ 救急：消防組織の中で救急業務を行う部署のこと。

※ えりと友香のこと：「えり」と「友香」は「寿々」の親友。「寿々」の仕事が不規則なため、高校卒業後はなかなか遊べていない。そんな中、「えり」と「友香」は「寿々」を誘わずに日帰り温泉旅行に行った。

※ 消火栓：消火活動に必要な水を供給するための設備。

※ 三連梯子：消火活動などの際に使う、約三メートルの梯子が三つ連なった梯子。

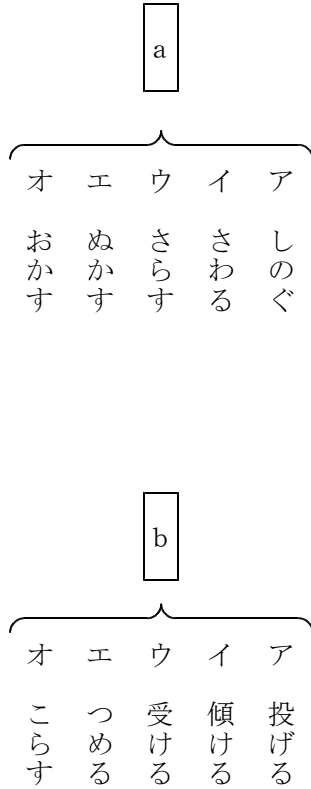
※ 空気呼吸器：呼吸が困難な場所へ侵入する際に身につける機器。空気ボンベ、顔を覆う面体など。

問一

a

b

に当てはまる言葉として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。



問二 ―― 線部① 「頭を一撃された感じが続いていた」とありますが、このときの「寿々」の様子を説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 消防士になってから、精一杯働いて周囲からも認められていると思っていたのに、中隊長から予想外に低い評価を聞かされて落ち込んでいる。

イ 消防士になってから、男性に負けないように必死に努力してきたのに、中隊長や先輩たちからバカにされていたことがわかってショックを受けている。

ウ 消防士になってから、どれほどがんばってきたかということの中隊長に伝えることができず、不本意ながら頭を下げた自分に腹を立てている。

エ 体を動かすことで人の役に立ちたいという強い使命感から消防士になったのに思い描いていたような働きができず、辞めるかどうか迷っている。

オ 消防士の仕事は女には務まらないという偏見を持っている中隊長から、女だからやる気がないと指摘されて、びっくりしている。

問三 ―― 線部② 「今、自分がするべきことは何か」とありますが、「寿々」は今何をしなければならぬと考えていますか。

本文中の言葉を使って三十字以内で説明しなさい。

問四 ——— 線部③ 「前回の雪辱戦にはまだ早い」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 前回の出動で怒られた恨みを晴らすにはまだ早いということ。

イ 前回の出動のできごとをすっかり忘れ去るにはまだ早いということ。

ウ 前回の出動を上回る活躍を見てもらうにはまだ早いということ。

エ 前回の出動の失敗を反省していることを伝えるにはまだ早いということ。

オ 前回の出動での失敗を取り戻す働きをするにはまだ早いということ。

問五 ——— 線部④ 「深呼吸してから、さらにブラシでこすっている」とありますが、このときの「寿々」の心情を説明したもので、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 消火活動は無事に終わったものの、責任のある役割を与えられず気持ちが沈んでいたが、犬を助けることができたのでうれしく思っている。

イ 消火活動は無事に終わったものの、自分は満足な働きができたとは言えず落胆していたが、今以上に頑張って一人前になるろうと気持ちを切り替えている。

ウ 消火活動が無事に終わり、犬も助けることができたのでほっとしていたが、次の現場でも同じような働きができるとは限らないので気を引き締めている。

エ 消火活動に参加することができず、早く一人前になりたいと焦^{あせ}っていたが、車両誘導や事後処理などに自主トレの成果を出せたので自信をつけている。

オ 消火活動に参加することができず、このままでは仕事を辞めさせられるのではないかと思ったが、それはそれでしかたがないと受け入れようとしている。

問六 ——— 線部⑤ 「寿々は目を丸くして相手を見つめた」とありますが、このときの「寿々」の気持ちを説明したものと最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア めったに会うことがない上司が自分のがんばりを見てくれていたことに喜んでいる。

イ 雲の上の存在だと思っていた上司から急に食事に誘われたので戸惑っている。

ウ あこがれていた年上の女性からほめられ食事に誘ってもらえたことに感動している。

エ 自分とは違う世界の人だと思っていた女性からいきなりほめられたので警戒している。

オ 自分とは接点のなかった女性が自分のがんばりを認めてくれることに驚いている。

問七 次のア～オは、この小説の最後の場面を読んだ生徒たちの感想です。本文の内容に合わないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア Aさん…中隊長が寿々を呼んだときに主婦が「女性の方だったんですね」と驚いていますが、犬を助けてくれた消防士を男性だと思っていたからでしょう。

イ Bさん…消防士は男性社会だから、寿々がどれだけがんばっても活躍する機会が与えられないのでしょうか。だからお礼を言われても素直に受け止められなかったのです。

ウ Cさん…火の中に飛び込んでいけないことを気にしている寿々は、消火活動が終わってから犬を助けたことはたいしたことではないと思っています。

エ Dさん…犬の飼い主である少年から気持ちのこもったお礼を言われて寿々は泣きそうになっています。必死で涙をこらえる寿々に感動しました。

オ Eさん…中隊長が最後に「頑張れよ」と優しく声をかけてくれたのが印象的でした。寿々を厳しい目で見ていた中隊長が寿々を認めてくれたのでしょうか。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

今は昔、静観僧正は、西塔の千住院といふ所に住み給へり。その所は、南に向かひて、大嶽をまもる所にてありけり。大嶽の戌亥の方のそひに、おほきなる巖あり。その岩のありさま、龍の口をあけたるに似たりけり。その岩のすぢに向かひて住みける僧ども、命もろくして多く死にけり。しばらくは、いかにして死ぬるやらんと、心も得ざりけるほどに、「この岩のあるゆゑぞ」といひたちにけり。この岩を、毒龍の巖とぞ名付けたりける。これによりて、西塔のありさま、ただ荒れにのみ荒れまさりけり。この千住院にも、人の多く死にければ、住みわづらひけり。この巖を見るに、まことに龍の大口をあけたるに似たり。人の言ふことはげにさもありけりと、僧正思ひ給ひて、この岩の方に向かひて、七日七夜 加持し給ひければ、七日といふ夜半ばかりに、空くもり、大地震動することおびただし。黒雲かかりて大嶽見えず、しばらくありて、その姿あらはれぬ。夜明け、大嶽を見れば、毒龍の巖くだけて散り失せにけり。それより後、西塔に人住みけれども、崇りなかりけり。

注 ※ 大嶽 … 比叡山の最高峰。

※ 巖 … 高くそびえる大きな岩。

※ 加持 … 願い事の成就や病魔の退散などを仏に祈り、助けてもらうこと。

『宇治拾遺物語』より

問一 〜〜〜線部 i 「おほきなる」、ii 「すぢ」、iii 「ゆゑ」をそれぞれ現代仮名遣いに直し、**すべてひらがな**で答えなさい。

問二 ……線部 X 「いかにして死ぬるやらん」、Y 「げにさもありけり」の現代語訳として、最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

X 「いかにして死ぬるやらん」

- ア どうして死んでしまうのだろうか
- イ どうして死なないようにできるだろうか
- ウ どうしても死んでしまうのだろうか
- エ どこで死ぬことになるのだろうか
- オ どんな人も死んでしまうのだろうか

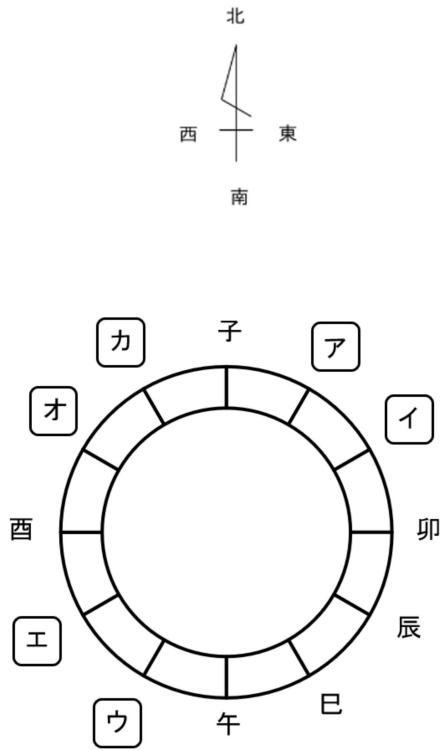
Y 「げにさもありけり」

- ア 全くあてにならないものだなあ
- イ ひどく大げさであるものだなあ
- ウ 本当にその通りであるものだなあ
- エ 全く確かめることができないものだなあ
- オ 本当にわけがわからないことだったなあ

問三 〓線部 A ～ C の「の」の中で、働き・意味が他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問四 〓線部 ① 「戌亥の方」^{いぬみ}について、次の問いに答えなさい。

(1) 「戌」、「亥」が入る場所として、適当な場所を次の図中のア～カからそれぞれ選び、記号で答えなさい。



(2) 「戌亥の方」が指す方角を答えなさい。

問五 ——— 線部② 「毒龍の巖とぞ名付けたりける」について、次の問いに答えなさい。

(1) ここで用いられている古文特有の決まりを何と言いますか、答えなさい。

(2) 「毒龍の巖」と名付けられた理由を説明しなさい。

問六 ——— 線部③ 「その姿あらはれぬ」について、「その姿」の内容を明らかにして現代語訳しなさい。

問七 次のA～Eについて、本文の内容として適当なものには○を、適当でないものには×をそれぞれ書きなさい。

- A 僧が多く死んで、千手院に住む者は皆去って行った。
- B 静観僧正は崇りをなくすため、岩に背を向け祈った。
- C 静観僧正が祈り、七日目の夜中に地震が起きた。
- D 岩に雷が直撃した結果、岩は砕けてなくなった。
- E 岩がなくなったあとは、崇りがなくなった。

問八 次の【文章Ⅱ】は、『日本往生極楽記』から【文章Ⅰ】と同じ話を抜粋したものです。また、後の【会話文】は【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んだ信子さんと愛子さんが話し合っているものです。【会話文】の①～④に当てはまる言葉を書きなさい。

【文章Ⅱ】

静観僧正は、左大史桑内安岑くはうらのやすみねが子なり。叡岳えいがくの嶺みねの上に、※透める巖、舌のごとくして、西塔に相向かふ。智徳の僧多く、※天亡てんぼうせり。古老の曰く、巖の妖なりといへり。静観僧正これを聞きて、巖を望みて嘆息し、三日祈念せり。一朝に雷電して巖悉く破れ砕けぬ。その破れたる片石は今に路の傍かたはらにあり。

注 ※ 透める：突き出ている。

※ 天亡せり：若くして死んでしまった。

【会話文】

信子さん：【文章Ⅰ】、【文章Ⅱ】どちらでも、僧たちが亡くなってしまう原因が岩のせいだと言われているね。

愛子さん：でも、その岩について【文章Ⅰ】では、へ①～のようだと書かれているけれど、【文章Ⅱ】では、へ②～のようだと書かれているよ。同じ話でも、違う書かれ方をしているのがおもしろいなあ。

信子さん：ほんとだね。他にも【文章Ⅰ】では七日祈ったと書かれているけれど、【文章Ⅱ】ではへ③～になっているところも違うね。

愛子さん：最後の一文も違うよ。【文章へ④～】では、今もそのできごとの証拠となるものが残っていると示すことで、本当に起こったできごとであるということを強調させているんじゃないのかな。

【一】

問一	a	秘密
	b	魅了
	c	理屈
	d	単純
	e	把握

--

問二

イ

問三

エ

問四

ウ

帰納法

演繹法

ア

どちらもでない

イ

問五

オ

問六

(1)

攪乱要因

(2)

い	を	を	攪
く	取	つ	乱
と	り	く	要
い	除	る	因
う	け	こ	の
こ	ば	と	数
と	取	は	が
。	り	不	多
	除	可	く
	く	能	、
	ほ	に	そ
	ど	近	れ
	、	く	ら
	現	、	を
	実	ま	排
	か	た	除
	ら	攪	し
	離	乱	た
	れ	要	状
	て	因	態

問七

A
ア
B
ウ
C
エ

問八

エ

問九

ア
消
え
る
魔
球
イ
空
気
抵
抗

エ	薬	の	効	き	目	を	阻	害	す	る	細	胞	の	中	の	物	質			
ウ	薬	を	分	解	し	て	体	外	に	排	出	し	て	し	ま	う	酵	素		

【二】

問一

a
ウ
b
イ

問二

ア

問三

自	本
分	物
を	の
鍛	炎
え	の
る	中
こ	に
と	飛
。	び
	込
	む
	自
	信
	を
	つ
	け
	る
	た
	め
	に

問四

オ

問五

イ

問六

オ

問七

イ

【三】

問一

i
おおきなる
ii
すじ
iii
ゆえ

問二

X
ア
Y
ウ

問三

C

問四 (1)

戊
オ
亥
カ

(2)

北
西

問五

(1)

係り結びの法則

(2)

岩の形が龍が大口を開けているのに似ていて、
その岩の筋向かいに住む僧たちが多く死んだから。

問六

大嶽の姿があらわれた。

問七

A
×
B
×
C
○
D
×
E
○

問八

①
龍
②
舌
③
三日
④
II